

聖書日課 『からし種』 2021.5.23—5.30

<p>5月23日 (日)  エレミヤ 17章</p>	<p>「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。心を探り、そのはらわたを究めるのは／主なるわたしである」(9－10節)。わたしは自分の心がどれだけ「とらえ難い病い」を抱えているか、自覚できていない。わたしの心を探り、正し、癒してくださるのは主なる神のみ。今日、わたしを新しく建て直してくださる方の前に共に集い合おう。</p>
<p>24日 (月)  エレミヤ 18章</p>	<p>「見よ、粘土が陶工の手の中にあるように、イスラエルの家よ、お前たちはわたしの手の中にある」(6節)。陶器師は、それぞれの目的に沿って粘土を練り、器を形づくる。私たちは自分で自分の人生をデザインするつもりでいるが、神さまがどんな祈りと愛を込めて「わたし」という粘土を練っておられるのか。その御心を尋ね求めることを何よりも大切にしたい。</p>
<p>25日 (火)  エレミヤ 19章</p>	<p>「あなたは…その壺を碎き、彼らに言うがよい。万軍の主はこう言われる。陶工の作った物は、一度碎いたなら元に戻すことができない。それほどに、わたしはこの民とこの都を碎く」(10－11節)。陶器師が祈りと愛を込めてつくりあげた器を碎くのは、よほどのことである。「碎く！」と言わざるを得ない神さまの悲痛な思いをしっかりと聴くことができるように。</p>
<p>26日 (水)  エレミヤ 20章</p>	<p>「主の言葉はわたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました」(9節)。エレミヤの心の中、骨の中に主の言葉が燃え上がっている。それほどまでに主の愛がエレミヤの心に激しく迫っているということ。主の愛はただ厳しいのではなく、私たちを新しく創りかえていく激しい愛。</p>

メール配信登録メール [senfukorn.obc@gmail.com](mailto:senfukorn.obc@gmail.com)

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2021.5.23—5.30

<p><b>27日</b> <b>(木)</b></p> <p>エレミヤ 21章</p>	<p>「主はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの前に命の道と死の道を置く」(8節)。私たちはどのようにして「命の道」と「死の道」を見極めることができるのか。人間の目に良いと映りながら、死に至る道がある。もし、私たちの中に「祈らなくても大丈夫」と、神さまを軽んじる心が芽生えていたら要注意。その道(選択肢)は死に至る道と思った方が良いのだろう。</p>
<p><b>28日</b> <b>(金)</b></p> <p>エレミヤ 22章</p>	<p>「正義と恵みの業を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救え。寄留の外国人、孤児、寡婦を苦しめ、虐げてはならない。またこの地で、無実の人の血を流してはいけない」(3節)。社会的立場の弱い人を覚えて、その叫びを大切な同胞の叫びと受け止め、決して軽んじるな。これは旧約・新約を貫いて聞こえてくる神さまの熱い呼びかけ。</p>
<p><b>29日</b> <b>(土)</b></p> <p>エレミヤ 23章</p>	<p>「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる」(3節)、「群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」(4節)。一匹の羊をどこまでも探し出し、ご自身のもとに連れ戻す神さまの約束。私たちの方が神さまを見失っている時も、真の羊飼いである神さまは探し出す働きをやめられない。</p>
<p><b>30日</b> <b>(日)</b></p> <p>エレミヤ 24章</p>	<p>「カルデア人の国へ送ったユダの捕囚の民を、わたしはこの良いいちじくのように見なして、恵みを与えよう」(5節)。捕囚に連れていかれた民を見捨てることなく、主が目を留めて恵みを与えてくださることを聖書は約束してくださる。主の憐みは、どこに住んでいるのかでわけられない。主の祝福が注がれる週をいただきたい。</p>